

「オイデイプス王」と「雲」

目 次

序
「オイディップス王」

一、劇までのあらすじ
二、オイディップス王の登場
三、王妃との対話
四、コリントスからの使者
五、羊飼い（元家来）の登場
六、王妃と王の悲劇
七、結末

九、解説
八、最後のコロス斎せいしやう唱

「雲」について

※ 一、思案所内部の全景
二、中断（中休み）
三、正論と邪論
四、正論（強い論）
五、邪論（弱い論）
六、結び

参考文献

オイデイプス王

序 「オイディップス王」

例えば、ソポクレスの『オイディップス王』という有名な作品は、人類史上最も評価の高い「悲劇作品」の一つであるが、それは、「……最初の言葉から、最後の言葉に至るまで、一字一句、たつた一字の言葉さえ書き直したり、また、書き加えたりする必要を殆ど感じない」というくらいに、まさに完成された『戯曲』（脚本）そのものということ」であり、それゆえ、そのまま「舞台」の「台本」としても十二分に使える「完全なるもの」（ペーフェクトなもの）であり、それに比べれば、シェイクスピアの様々な「作品」などは、あまりにも「無駄な言葉」が多過ぎると感じてしまうほどであるが、それは、一体、なぜかと問えば、それには、次のような理由があるからである。

まず最初に、古代ギリシアという時代は、もちろん、いわゆる「書き言葉」も当然ありました。しかし、まだ「話し言葉」中心の世界であり、それゆえ、誰もが「本」を自由に読むというような時代ではなく、日常生活においては、多くは「話し言葉」中心で過ごしていたような時代であったということである。それは、例えば、政治家の演説にしても、また、裁判における法廷弁論にしても、或いは、ディオニソス劇場で演じられる「悲劇」なども、すべて「耳」から入ってくる「音」（話し言葉）として聞いていたのであり、今日のように、書物、その他などの「書き言葉」（文字）などを黙読で読むというようなことは、一部の人たちに限られていたのである。そして、当時は、一人一人が「本」（書物）を持つというような状況ではなく、むしろ「本」（書物）を手に入れた人が、「仲間」（或いはみんな）の前で読んで聞かせるというようなものであり、それゆえ、一般の人たちは、いわゆる「本」（書物）というものを直接、読むというよりは、むしろ「朗読」を聞いて、つまり、「耳」から入ってくる「音」（言葉）として聞いていたということである。——例えば、プラトンの『ペイドン』という著作のなかで、若いソクラテスは、「……ところで、いつか、ある人が、アナクサゴラスの書物——ということだつたが、そのなかから、万物を秩序づけ万物の原因となるものは知性であるという言葉を読んでくれるのを聞いて、ぼくはその『原因』に共鳴した。そこで、（中略）、……ぼくは、大急ぎでその書物を手にし、できるだけはやく読んだ。……」という下りがある。つまり、当時は、有名な様々な「政治家の演説や法廷弁論或いは悲喜劇」などを声に出して「暗唱」（つまり丸暗記）をして覚えるというのが、まさに学習の「一つの方法」であつたとともに、また、「本」（書物）なども、ただ黙つて読むというよりは、むしろ声に出して「暗唱」するようなことが多かつた時代であったということである。（それは、例えば、ホメロスの叙事詩なども、声に出して「暗唱」されたということである。）

そして、文章を書くというのは、最初の頃は、まさに「覚え書き」（つまり忘れないため）として書かれたものであつたが、しかし、やがて、自分の「思いや考え」などを巧みに表現する「文章」となり、そして、それをさらにまとめ上げたものが、やがて「一冊の書物」になつたということである。もちろん、知識人たちの間では、いわゆる「本」（書物）を書くということが盛んにはなるが、しかし、一般の人たちの中には、まだ文字が読めないような人たちもいて、日常の生活においては、多くは「話し言葉」中心で過ごしていったような時代であつたということである。——例えば、ソクラテスは、その『弁明』のなかで、「……それはアナクサゴラスなのだよ。愛するメレトス、君が訴えているつもり

の人は。そしてそれだけ、君は、ここにいる諸君をばかにしているわけなのだ。つまり、君は、この諸君が文字を解しない人たちで、クラゾメナイのアナクサゴラスの書物には、いま君の言つたような議論が、いっぱい載つているということを知らないと思っているのだ。……」と反論しているが、この『ソクラテスの裁判』には、自由市民のアテナイ人五百人が参加をして裁判を行なつていたものであり、その人たちの中には、まさに「文字を解しない人たち」もそれなりにいたのだろうという証拠となるものである。つまり、まだまだ「話し言葉」を中心の時代であったということである。

そして、そのような「話し言葉」を中心の時代であつたということは、今日のようには「本」（書物）というものが、ただ黙読で読まれることが期待されていたというよりは、むしろソポクレスの『オイディップス王』なども、まさに遙かに声に出して「暗唱」（つまり丸暗記）されることが期待されて、書かれたものであり、それゆえ、その最初の段階から、目で読む「本」（書物）などではなく、ほとんどすべて「耳」から入つてくる「音」（話し言葉）として、いかに魅力的で、いかに説得力があるかということで書かれているものである。それに比べれば、シェイクスピアの「作品」などは、遙かに目で読む「本」（書物）として書かれているものであり、それゆえ、どうしても「長過ぎるセリフや不必要的言葉」（或いは「無駄なセリフ」）などが多くなってしまうということである。

もちろん、シェイクスピアの「頭の中」（或いは「心の中」）では、当然のことながら、「舞台」の上で生身の人間たちが演じる「演劇」の「台本」として、いかに魅力的で、いかに説得力のあるセリフかを考慮に入れて、書かれているだろうが、しかし、「話し言葉」を中心の時代に生まれた作品と、「話し言葉」と「書き言葉」とがすでに併用されている時代に生まれた作品との間には、まさに「決定的な違い」があるということである。——例えば、『源氏物語』を書いた紫式部は、実際に「宮廷」に仕えて、そこで藤原道長を初めとして、実際に見聞きして、そのような実に様々な「生の経験」などを踏まえて、つまり、その時代の雰囲気、その時代の言葉使い、その時代の生活ぶり、その時代の意識（心の動き方）、その他、そのようなその時代に生きている人たちでなければ絶対に分からぬ「微妙な違い」などを厳密に感じ分けながら、いわゆる『源氏物語』は、書かれているのであり、それに比べて、一方の、例えば、シェイクスピアの『ジュリアス・シーザー』などは、全く時代の違う、見たことも、実際に会つて話をしたこともない、遙か遠い古代ローマ時代の人たちの「心の動き」などをたとえ巧みに表現し得たとしても、それは、シェイクスピアの「頭の中」（或いは「心の中」）であれこれ想像して書かれたものであり、それゆえ、『源氏物語』などとは、まったく違うものになるということである。

一、劇までのあらすじ

それでは、次に『オイディップス王』の内容について、少し考えてみたいと思うが、それは、次のようなものである。まず、「デルポイの神託」によつて、「……時の王ライオスは、やがて生まれる子供の手にかかるべき運命にあることを、告げられる。……」そこで、時の王ライオスは、「王妃」（イオカステ）に一子（男の子）が生まれると、すぐに「家来」の一人にその「赤子」を手渡しては、キタイロンの山間^{やまあい}深くに捨

てて、この世から葬り去るようになると命じることになる。ところが、その「家来」は、山に捨てず、その「赤子」をその土地の「羊飼いの人」に預けてしまう。その後、その「赤子」は、コリントスの国王ポリュボスの息子として大事に育てられ、順風満帆に「青年」（若者）へと成長していく。——ところが、ある日、宴会の席上で、酒に酔つた人にからまれて、おまえは、ほんとうは父親の子ではないと言われる。その言葉に不安がよぎり、国王や王妃に訊ねてみても、その質問には答えてはくれない。そこで、両親には内緒で、その真相を訊ねるために、一人で、「デルポイの神託」をうかがいにおもむくことになるが、しかし、そこでの「お告げ」は、実際に恐ろしい信じられないような「内容」のものであり、それは、「……（なんじは）、自分の母親と交わり、それによつて、人ひとに正視するに堪えぬ子種をなして世に示し、あまつさえ、自分を生んだ父親の殺害者となるであろう。……」というものだつたわけである。

そこで、オイディップスは、いわゆる「お告げ」のようなことが決して起らぬないようにと、コリントスからできるだけ遠く離れたところに行こうと決心をして放浪することになる。——ところが、たまたま四人のお供を連れて、いわゆる「デルポイの神殿」へと旅に出た馬車に乗つたテバイの「国王」（つまり「実の父親」）の一行と、三叉路のところで、オイディップスは、ばつたりとめぐり逢つてしまう。その結果、道の譲り合いなどで揉めて、実の父親と三人のお供を殺害してしまうが、一人だけ生き残つた「お供の人」（この人は、赤子を山に捨てに行つた家来でもあるが）は、テバイの都へと逃げ帰り、そして、国王ライオスとお供の三人は、盜賊たちに襲われて殺害されてしまつたと、なぜか「うその報告」をすることになるのである。

さて、その後、まもなくテバイの都には、スフィンクスという怪物が出没することになる。そのスフィンクスは、肉体は、「獅子」（ライオン）の姿をし、背中には両翼を持ち、その「顔」は、人間の女性の顔をしていた怪物であったが、そのスフィンクスは、テバイ市付近の岩の上にいて、その道を通る人たちに「謎」をかけていたという。しかも、その「謎かけ」が解けなかつた人たちには、その場でみんな殺されていたために、テバイの人たちは、非常に恐れていたわけである。しかも、その「謎かけ」というのは、非常に有名なものであり、一般には、「……朝は四脚、昼は二脚、そして、夜は三脚で歩く動物はなにか？」という「謎かけ」になるかと思うが、しかし、その当時の内容は、「……一つの声をもち、二つの足にしてまた四つ足にしてまた三つ足なるものが地上にいる。地を這い空を飛び海を泳ぐものどものうち、これほど姿・背丈を変えるものはない。それがもつとも多くの足に支えられて歩くときに、この肢体の力は、もつとも弱く、その速さは、もつとも遅い。……」という韻律を持つた五行の歌で歌われるものであつたという。

一方、そこをたまたま通りかかつたオイディップスは、同じ「謎」をかけられ、それに対しても遅い。——ところが、それは、「人間である」と答え、「……なぜならば、赤ん坊の時には、這い這いをして四本で歩き、その後は、立つて歩くようになるので二本脚になり、そして、年老いてくると、杖をついて歩くようになるので、三本脚になるからだ」とスフィンクスに答えると、その「答え」を聞いたスフィンクスは、その「謎」を解かれたことを非常に悔しがつて、その場で身を投げて死んでしまつた、という有名な話へと展開することになるが、このことが、つまり、テバイの人たちを苦しめていたスフィンクスという怪物を退治したということで、テバイの人たちから推举されて、テバイの国王になるとともに、実の母親で

もある「王妃」（イオカステ）とも結婚をして、二女二男の四人の子供までもうけて、いわば幸せな十数年を過ごすことになる。しかし、そのことは、「……（なんじは）、自分の母親と交わり、それによつて、人びとに正視するに堪えぬ子種こだねをなして世に示し、あまつさえ、自分を生んだ父親の殺害者となるであろう。……」という「デルポイの神託」のお告げが図らずも成就してしまつたことになる。その結果として、テバイの都には、疫病がひろがり、作物は枯れ、家畜は死に絶え、女らのはらむ子は死に、こうして苦しみと嘆きの声は、ちまたに満ちあふれるようになるとともに、オイディップス王の宮殿の前にも、テバイの老若ろうじやくの市民たちが、嘆願のしるしとして、白い羊毛ようもうの房ふさのかざしをまいたオリーブを捧げ、ひざまずいているという、『オイディップス王』の「悲劇」の幕が、まさにここから「舞台の上」で生身の役者たちによつて演じられることになるということである。

二、オイディップス王の登場

さて、宮殿の扉が開かれ、オイディップス王は、従者を従えて堂々と登場して来る。そして、嘆き悲しむ嘆願者たちの中の、一人の年老いた神官に向かつて、「……さあ、翁おきなよ、話してみるがよい。これにひかえたお前たちの、心のうちを聞かせてくれ。何の憂い、何の願いなのか。このわたしは、どんなことをしても、お前たちの助けになるつもり。もしこのような嘆願に心を動かされないとしたら、わたしは血も涙もない男というべきであろう」と語る。それに応えて、翁おきなは、スフィンクスの時のように、「……なんらかの救いの途をわたくしどものために、見出してくださいませ、国をたすけ起こしてくださいませ」と嘆願することになる。——一方、オイディップス王は、「……救われるためのただひとつ」の対策、それをわたしはすでに実行に移したのだ。それは、王妃の弟クレオンを、デルポイなるアポロンの社やしろにつかわして、国を救うためには何を為し何を言えばよいのか、うかがいを立ててくるように命じてある」と語る。やがて、その「使い」（クレオン）が戻つて来て、次のように告げるのであつた。それは、「……この地には、ひとつの大汚れが巢くつている。その清めの途は、罪びとの追放、もしくは血をもつて血をつぐなうこと。——國をゆるがしている嵐の因もとは、その流された血にありと知れ。……」というものであり、それは、つまり、「前国王」（ライオス）を殺害した下手人げしゆにんを見つけ出して、それを罰せよ、という内容になるということである。

そこで、オイディップス王は、「前国王」（ライオス）を殺害した下手人げしゆにんを見つけ出す「方法」として、まず、次のような「布告」を出すのである。それは、「……もしお前たちのうちに、ラブダゴスの子ライオスが誰の手にかかつて、最期をとげたかを知る者があれば、わたしはその者に命じる、その旨を包まずこのわたしに申し出よ。次に、もし当の罪びとがいて恐れているのであれば、すべからく自首して出て、その咎とがをわが身より除き去るがよい。そうすれば、過酷な罰は何ひとつ受けることなく、身柄は無事のまま、国外げいがいへ立ち去るだけですむだろう。さらにまた、もし殺害者が他國の人間であつて、その下手人げしゆにんを知つてゐる者があれば、その場合も決して口をつぐんでいることはならぬ。知らせた者には褒美ほうびをとらせた上に、わたしは感謝の気持を惜しまぬだろう。

さりながら、もしお前たちが口をつぐんでいるつもりならば、そして恐れのためにこの申しつけにそむいて、友ないし自分の身をかばおうとする者があるならば、それに対しても

わたしのとる処置を、いまこのわたしの口からよく聞いておくがよい。——よいか、いやしくもわたしが王位にあつて支配しているかぎり、この地にすむ者は誰ひとりとして、罪をかくすその男を、それがよし何者であれ、家に迎えることも、話しかけることも、けつしてあいならぬ。その罪びとと共に神々に祈ることも、犠牲をささげることも、また清めの式にあずからしめることも、いつさいあいならぬ。國民こそぞてこの男を、家々よりしりぞけ（追放せよ）。ピュテイアの神託がいましがた、わたしに示したもうたところによれば、われらの国の汚れは、ほかならぬこの男にあるのだから」と告げるのであつた。

ところで、この「布告」の中で、例えは、「……もし当の罪びと（先王の殺害者）がいて恐れているのであれば、すべからく自首して出て、その咎をわが身より除き去るがよい。そうすれば、過酷な罰は何ひとつ受けることなく、身柄は無事のまま、国外へ立ち去るだけですむだろう」とある。それでは、なぜ、オイディップス王は、このような「軽い刑」でよいと考えるのだろうか？ それは、「罪びと」が自首しやすくするためと、もう一つは、今、何よりも大事なことは、先王の殺害者を「重く罰する」ようなことではなく、今、最も大事なことは、「……テバイの都には、疫病がひろがり、作物は枯れ、家畜は死に絶え、女らのはらむ子は死に、こうして苦しみと嘆きの声は、ちまたに満ちあふれているような情況（状態）から、一刻も早く、救い出すこと」であり、そのためには、「……この地には、ひとつ汚れが巣くつてゐる。その清めの途は、罪びとの追放、もしくは血をもつて血をつぐなうこと。——国をゆるがしてゐる嵐の因は、その流された血にありと知れ。……」とあるように、まさに「罪びと（先王の殺害者）」を（国外に）追放する」ことによつて、その「汚れを清める」ことができて、テバイの都は、まさに救われる」とことになるからである。——一方、「罪びと」（先王の殺害者）がテバイの都に潜んでいる限りは、「……テバイの都には、疫病がひろがり、作物は枯れ、家畜は死に絶え、女らのはらむ子は死に、こうして苦しみと嘆きの声は、ちまたに満ちあふれている情況（状態）は、なおも続き」、その「禍」から解放されることがないということである。

*

*

さて、オイディップス王の、「前国王」（ライオス）を殺害した下手人を見つけ出す「方法」としての、もう一つの「方法」は、王妃の弟クレオンの「進言」を受けて、「ポイボス」（アポロン）とほほかわりなき、もの見る力の持ち主として名高い、一人の年老いた盲目の「予言者」（ティレシアス）を連れて来るようとに、オイディップス王は、すでに「命令」を出しており、やがて、その年老いた盲目の「予言者」は、少年の手にひかれて、やつて来ることになる。そこで、オイディップス王は、さつそく、「前国王」（ライオス）を殺害した下手人は、いつたい誰なのか？ その年老いた盲目の「予言者」に何度も問い合わせ、とことん問い合わせることになるが、その年老いた盲目の「予言者」は、何としてもそれに答えようとしている。しかし、オイディップス王の余りにもひどい言葉に終には憤慨して、最後には、「……前国王（ライオス）を殺害した下手人は、オイディップス王、あなた自身だ」と答えてしまう。これに激怒したオイディップス王は、「これは、何らかの「陰謀」（悪企み）に違いないと思い込んで、王妃の弟クレオンとこの年老いた盲目の「予言者」とが結託をして、自分の王位を狙う陰謀者として逆に疑つてしまふ展開になるが、一方、王妃の弟クレオンは、自分が疑われたことに激しく憤慨はするが、オイディップス王と「会話」を重ねていく中で、「……自分は、王妃の弟であり、それゆえ、今でも王位と同じくらい

自分の思い通りの生活ができるのに、何で好んで王位などを狙う必要があるのか？」
と言い、また、そこにやって来た「王妃」（イオカステ）にも説得され、オイディップス
王は、その「怒りや疑い」などをしぶしぶ収めることになるのである。

三、王妃との会話

そして、今度は、「王妃」（イオカステ）との「会話」になつていくわけだが、その会話の中で、それにも関わらず、なぜそこまで激怒なさるのかと聞かれて、オイディップス王は、それに答えて、彼と盲目の「予言者」とが結託をして、「……自分を前国王（ライオス）を殺害した下手人だ」と言うのだ」というと、「王妃」（イオカステ）は、「……それならば、安心して下さい。前国王（ライオス）は、旅の途中、三叉路のところで、盗賊たちに襲われて殺害されたのです」と言うと、それを聞いたオイディップス王は、その「三叉路」という言葉に極めて敏感に反応して、「……妃よ、何とわが心はゆらぎ、わが胸は騒ぐことであろう」と言つて、「王妃」（イオカステ）から、その時の様子をできるだけ詳しく聞くことになるが、詳しく聞けば聞くほど符合するところが多くなり、不安は、ますます深まっていくが、一つだけ符合しないところは、「……前国王（ライオス）は、一人ではなく、盗賊たちによって殺害された」というところであり、そこで、オイディップス王は、一人なのか、それとも複数なのか、そこがどうしても正確に知りたくて、事件の知らせをもたらした家来、それは、一人だけ生き残った「お供の人」（この人は、赤子を山に捨てに来た家来であるが）を、すぐに連れて参れと命令することになるのである。

四、コリントスからの使者

さて、「王妃」（イオカステ）は、手に祈願の小枝と香を持ち、侍女たちを従えて館の内から登場し、アポロンの祭壇の前に立ち、オイディップス王の「尋常ならず心痛」を心配して、アポロンの神に、「……なにとぞわたくしのため、この穢れをきよめ、救われる途をお示しくださいますように。このままでは、（中略）、ただおびえおののくばかりでござります」という祈りを捧げ終わる頃に、コリントスからの「使者」がやってくる。そして、その「使者」は、コリントスの「王」（ポリュボス）が病気でなくなり、かわりで、オイディップスにそのコリントスの「国王」になつてほしいという「知らせ」をもたらすことになる。その「知らせ」を聞いて、オイディップス王は、ひとまず、これで「父親の殺害者」にならずに済んだと喜ぶが、しかし、まだ「母親」が残っているので、安心はできぬと言うと、そのコリントスからの「使者」は、「……その懸念は何の言われも無きものと、ご承知あれ」と言う。なぜかと問うと、「……ポリュボス様はあなたにとつて、何の血のつながりもないおかたでした」と告げる。そして、そのコリントスの「使者」は、ことの次第をさらに説明することになるが、それは、山で羊飼いをしていた時、山に「赤子」を捨てに来た「家来」から、その「赤子」をあずかり、そして、お子さまのいなかつたコリントスの「国王」（ポリュボス）に、わたしがさし上げたのです。しかも、その「赤子」の「両足を刺し貫いた留金も、わたしが抜いてさし上げたのです」と説明をする。すると、オイディップス王は、それでは、その山に「赤子」を捨てに行つた「家来」に会いた

いと言ふと、それは、前に「早く連れて参れ」と言つた、事件の知らせをもたらした家来、その一人だけ生き残つた「お供の人」こそは、まさに「赤子を山に捨てに行つた家来」であると知らされるのである。

五、羊飼い（元家来）の登場

そして、「物語」（ストーリー）は、まさにクライマックスへと向かうことになるが、それは、当の「羊飼い」（それは、すつかり年老いた「元家来」）がやつてくるからである。そして、その「羊飼い」（元家来）と「使者」それに「オイディップス王」との、この三人の「会話」になっていく。そして、当の「羊飼い」（元家来）は、できるだけ核心部分は何も語りたくないと思つているが、それは、なぜかと問えば、それは、まさに「すべてを知つてゐる」からである。——つまり、時の国王ライオス（正確には「王妃」）から、三日も立たぬ「赤子」を山に捨てるようになると命じられたこと。だが、その「赤子」は、山には捨てず、その土地の「羊飼いの人」（つまり「使者」）に与えたこと。また、三叉路さんさろで、国王ライオスとお供の三人が、オイディップスに殺害され、自分だけ一人生き残り、テバイへと逃げ帰り、そして、「うその報告」（つまり「盜賊たちに殺害されたという報告」）をしたこと。そして、そのオイディップスが国王になつた時に、王妃にどうか自分をいなかへとやつて、羊飼いにしてほしいと切に願い出、結局、羊飼いになつたこと。つまり、彼は、すべてのことを知つてゐる、まさに「生き証人」その人そのものなのである。

一方、オイディップス王は、何が何でも「真相」（ほんとうのこと）が知りたいと強く決心していく、それに不安を感じた「王妃」（イオカステ）は、おん身のため、もうこれ以上深く詮索なさることは、後生だからおやめになつてくださいと心の底から懇願するが、聞き入れられず、やがて、王妃は狂わんばかりの御苦悶にかり立てられて、館の内へと走り込んでしまう。一方、オイディップス王は、「羊飼い」（元家来）に、「……お前はこの者（使者）に赤子を与えたのか、与えなかつたのか？」と問い、「……言わぬと、命はないぞ」と脅されるので、結局は、「与えた」と答えてしまう。それでは、誰が「赤子」をお前にあずけたのかと聞くと、それは、「王妃さま」でござりますと答え、「何のために？」と聞くと、それは、「……殺すようにとの、御言いつけ」でしたと答える。「……非情にも、みずから子を？」と問うと、それは、「……この子がやがて、親を殺すであろうとの、お告げのため」なのですと答える。それでは、「……お前は、なぜこの老人（使者）に渡したのだ」と聞くと、それは、「……不憫で殺すに忍びなかつたからでございます。王よ、きっとこの男が自分の故郷の、遠い他国へ連れ去るだろう」と思つて、そうしたのですと答えると、オイディップス王は、「……すべては紛うかたなく、果たされた」と言つて、宮殿の内へと走り込んでしまう……。

六、王妃と王の悲劇

さて、狂わんばかりの御苦悶にかり立てられて、宮殿の内へと走り込んだ「王妃」（イオカステ）は、結局は、夫婦の臥床で首を吊つて自害をしてしまう。そして、その時の様子はと言えば、「……亡くなられた前の夫ライオスの名前を呼び、呼びつつ想うこととは、

二人の間に生まれた子供のことであり、その子の手にかかる父親みずからは命を失い、残された母親は、自分の生みの子との間に子種をなすことになってしまったという、おぞましい『運命』のこと、そして、夫によって夫を生み、子によつて子を生み、かくて二重の母となつたその『夫婦の臥床』を嘆いた。……』ということである。一方、オイディップス王は、あちこちを走り回つて「王妃」（イオカステ）を探しまわり、やがて、門のかかつた「両開きの扉」をこじ開けると、そこで目にしたものは、宙に吊られたまま、なお揺れているお妃さまの姿であった。それを見るなり、獣のような恐ろしい叫び声をあげて、妃の首にかかつっていたひもをほどき、そして、妃の亡骸を床に横たえてから、オイディップス王は、こう叫びながら。「……もはやお前たちは、この身にふりかかってきた数々の禍も、おれがみずから犯してきたもろもろの罪業も、見てくれるな！　いまよりのち、お前たちは、暗闇の中にあれ！　目にしてはならぬ人を見、知りたいとねがつていた人を見わけることができなかつたお前たちは、もう誰の姿も見てはならぬ！……』と叫びながら、妃の上着を飾つていた、黄金づくりの留金を引き抜くなり、高くそれをふりかざして、ご自分の両の眼ふかく、真向から突き刺し、しかも、「……いくたびもいくたびもあのかたは、手をふりかざしては両の眼を突き刺しつづけたのです。……』ということになる。（ちなみに、「お前たち」とは、すなわち、オイディップス王の「両眼」のことである。）

七、結末

その後、オイディップス王は、長く嘆き叫びながらも、次の国王になるであろう、王妃の「実の弟」（クレオン）に、王妃の亡骸の埋葬は、「……よきように取りはからつてもらいたい」と頼み、また、自分の身柄については、自分が生きている限り、決してこの祖国テバイの住民たらしめることなく、ねがわくば、わが父母が生前、わしの墓場と決めたキタイロンの、あの山間ふかく住まうことをゆるしてくれたまえ。そこで死んでいきたいのだと。ただ、心から心配なのは、残された四人の子供のことであり、男の二人は、男の子だから、心配はないだろうが、可哀そうな二人の娘、どうかあの娘たちのことは、くれぐれも気づかつてやつてくれと。そして、ゆるされるならば、最後の頼みを聞いてもらいたい。それは、「……いまあの子たちに手を触れて、心ゆくまで不幸を嘆きたいのだ。……』と。そこで、すすり泣く娘たちと最後の別れの時を過ごしては、オイディップス王は、「……それではさあ、わしをここから連れ去つてくれ」と言つて、クレオンに導かれて宮殿のほうへ歩み去る。コロス齊唱をもつてこれを見送る、というところで幕が下りることになるわけである。

八、解説

さて、非常に長い「内容」説明になつてしまつたが、それは、なぜかと言えば、それは、多くの人々たちは、もちろん、有名な『オイディップス王』の話は、よくご存知だろうと思うが、しかし、こと細かな「内容」までは、恐らく、よくは知らないだろうと思って、敢えて「こと細かな内容」をできるだけ「原文」（翻訳文）の文章を生かして、説明してみたかったということである。それでは、『オイディップス王』という作品の、いつたいどこが

どのように優れているのかという問題について、少し考えてみたいと思う。

*

*

まず、オイディップス王は、何も知らなかつた。或いは、何も知らされてはいなかつた。だからこそ、そこから、まさに「ドラマ」が始まるのである。そして、唯一知らされたることは、あの「デルポイの神託」における、「……（なんじは）、自分の母親と交わり、それによって、人びとに正視するに堪えぬ子種をなして世に示し、あまつさえ、自分を生んだ父親の殺害者となるであろう。……」という「お告げ」の言葉だけであつた。しかも、その「お告げ」の言葉は、人間のいかなる努力を持つてしても、何としても逃れることのできない、まさに「運命」（或いは「宿命」）そのものになつてゐるということである。それは、——例えば、孫悟空が力の限りを尽くして世界の果てまで行つても、結局は、お釈迦様の「手の中」（つまりは「運命」そのもの）からは、如何とも逃れがたいのと、まったく同じことである。つまり、登場人物全員は、オイディップス王の不利になるような発言は、なるべく避けようとしているにもかかわらず、オイディップス王自身が「事実や眞実」を無理やりに言わせてしまう、まさに「悲劇」そのもの（つまり「良かれと思つてやつていることが、結果としては、すべて不幸な方向へと向かってしまうということ」）である。

例えば、「人間界」と「天上界」（つまり「神々の世界」）とがあるとすれば、「天上界」つまり「神々の世界」では、人間が行なつてゐるすべての「行為」（言動）などは、すべてお見通しということになつてしまふ。それゆえ、「人間界」でたとえ他人をいかにうまく「ごまかし通せたとしても、いわゆる「天上界」の神々をだますことはでき得ない。例えば、「神々」（或いは「自然の摂理」）によつて、その人の一生の「運命」が定められてしまうと、その人は、いくらその「運命」から逃れようと努力をしても、その人は、その定められた「運命」からは、何としても逃れられないことになる。——例えば、われわれ人間にとつて、どのような両親から生まれるかは、まさに「運命」（或いは「宿命」）そのものであり、また、その人の「姿・形」（すがたかたち）がどのようなものになるのかも、すべて両親のまさに「遺伝子」（DNA）の組み合わせによつて決定づけられてしまう。それゆえ、その「運命」（或いは「宿命」）からは、誰も逃れることはでき得ないのである。また、ある病気になる「遺伝子」（DNA）を持つて生まれた人は、本人がいくらその「病気」から逃れようと努力をしても、結局は、その人は、その「病気」になつてしまふ。そして、それをその人の「運命」（或いは「宿命」）と呼ぶならば、呼ぶことも出来得るだろう。そして、その人のその「運命」（或いは「宿命」）からは、本人がいくら努力をしても、何としても逃れがたいということである。

それでは、主人公であるオイディップスという人は、なぜ、「……（なんじは）、自分の母親と交わり、それによつて、人びとに正視するに堪えぬ子種をなして世に示し、あまつさえ、自分を生んだ父親の殺害者となるであろう。……」というような、まさに「運命」（或いは「宿命」）を背負つて、この世に生まれて來たのだろうか？——まず、考えられることは、両親の何らかの「罪」（罪業）が、子にむくいるということである。そのため、父親は、わが子に殺され、母親は、わが子と交わり、やがては自ら命を絶つような結果になつてしまふ。次に考えられることは、オイディップス王自身が、いわば「前世」において、何らかの「重い罪」を犯したために、このような「運命」（或いは「宿命」）を背負わされて、この世に生まれてきたということである。もちろん、今日のわれわれには、

そのような「考え方」はでき難いが、しかし、当時の人たちにとつては、それは、あまりにも自然な「考え方」の一つであったことに間違はないだろう。

さて、オイディップス王は、なぜ、ちまたに、このような嘆き悲しむような事態が生じているのか？ その「原因」とその「解決方法」とを何としてでも探し出さなければならぬと考える。——そこで、具体的には、まず最初に、「アポロンの社」におうかがいを立て、それによつて、「……この地には、ひとつ汚れが巢くつている。その清めの途は、罪びとの追放、もしくは血をもつて血をつぐなうこと」と告げられる。つまり、「前国王」（ライオス）を殺害した下手人を見つけて、それを罰せよ、ということだと知る。次に、一人の年老いた盲目の「予言者」を呼び、訊ねることによつて、「……前国王（ライオス）を殺害した下手人は、実は、オイディップス王、あなた自身だ」と聞かされる。また、「王妃」（イオカステ）からは、国王が殺害された、いわゆる「三叉路での事件」についての詳しい内容が知らされる。そして、「使者」からは、あなたは、実は、コリントスの「国王」（ボリュボス）の実の子供ではなく、実は、この私が子供のいなかつた国王に「赤子」（あなた）を与えたのです、ということが判明する。さらに、「羊飼い」（元家来）から、誰が何のために「赤子」を山に捨てるように命じたのか？ それは、王妃からであり、その理由は、「……この子がやがて、親を殺すであろうとの、お告げのため」であったと言い、また、なぜ「赤子」は山に捨てられず、その土地の「羊飼い」（つまり「使者」）にあずけられたのか？ それは、あまりに「……不憫で殺すには忍びなかつたから」と、それらすべてのことが明らかになつていくという展開になつてゐるのである。

つまり、『オイディップス王』という作品は、まさに「謎解き」が生命の作品であり、オイディップス王自らが、積極的に、次から次と様々な「事実や真実」などを明らかにしていく過程が、同時に、そのままオイディップス王の「生い立ち」（その「全人生」）の「謎解き」になつていくという、つまり、オイディップス王に関わる様々な「謎」が少しづつ解かれしていくという展開になつてゐる。しかも、その「謎」が解かれていくたびに、オイディップス王は、まさに「驚愕と戦慄」とを覚えることになる。なぜなら、ふつうであれば、吉報となるものも、逆に、悪報になつてしまふ。良かれと思つてやつていることが、逆に、悪い方向へと向かつてしまふ。やることなすことが、すべて「悲劇」へと向かつて行く。それは、なぜかと問えば、それが、まさにその人の生まれながらに背負つてゐる「運命」（或いは「宿命」）だからということになる。——つまり、「人間界」の努力だけでは、「天界」（或いは「自然界」）の摂理は、如何ともし難い。例えは、「天界」が、仮に全能的な世界であるとすれば、この「地上界」（「人間界」）というのは、知る能力にも、また、行なう能力にも、自ずと「限界」があり、「天界」（或いは「自然界」）の摂理からは、何としても逃がしたいということである。つまり、「天」（或いは「自然界」）に逆らうことは、如何ともでき難い。だからこそ、われわれ人間は、まさに「畏敬の念」を持つて、「天」（或いは「自然界」）と向き合わなければならぬがた。また、われわれ人類は、遙か遠い大昔から、ずっとそのような「向き合い方」を続けて來たということである。

つまり、「天」（或いは「自然界」）というのは、本来、どこまでも「不気味で恐ろしいもの」であり、例えは、海あれ、山あれ、川あれ、空あれ、その他、何あれ、ひとたび本氣で荒れ狂つたら、人間などひとたまりもないものである。だからこそ、われわれ人類は、遙か遠い大昔から、様々な「自然」を「神」として崇め、祭り、生け贋や供

え物などをし、歌つたり、踊つたりして、その「ご機嫌」を伺いながら、まさに「自然の驚異」を「鎮めてきた」ということである。そういう意味では、例えば、「デルポイの神託」なども、いわば「無力な人間」が、まさに「天」の声を聞くという一つの「象徴的な行為」になつてゐるのだろう……。

九、汝自身を知れ

例えば、デルポイの「アポロン神殿」には、有名な「汝自身を知れ」という銘文が記されている。もちろん、それについては、いろいろな解釈がなされているだろうが、基本的には、一つは、文字通り、「自分自身を知る」ということ。一つは、「自分の分をわきまえる」ということ。そして、もう一つは、「人間としての分をわきまえろ」という意味になるかと思う。——例えば、オイディイプス王は、いわゆる自分自身の「出生の秘密」については、何も知らなかつた。或いは、何も知らされてはいなかつた。だからこそ、まさに「悲劇」は生じるのであり、若しも何もかも知つていたならば、そもそも「悲劇」の起こりようがないものである。それは、実の父親を殺したり、また、母親と結婚したりするようなことは、ふつうでは起こりにくいものである。例えば、『ロミオとジュリエット』についても、相手が死んだと思ったから、自分も自害するのであり、相手がやがて生き返ると知つていたならば、何も自害などする必要もなければ、また、お互いが自害し合うという「悲劇」なども起こりようがないのである。例えば、われわれの「人間関係」にしても、お互いの「心」が何から何まで分かつていれば、そもそも「誤解し合う」というようなことがなければ、また、その様々な「誤解」から、何らかの揉め事や争い或いは「悲劇」などが生じるということも、基本的にはあり得ないということである。そういう意味では、様々な「無知や誤解」こそは、まさに何らかの揉め事や争い或いは「悲劇」などが生じる、まさに「源泉」になるということである。

十、悲劇と喜劇

それでは、「悲劇」とは、一体、何かという問い合わせに對して、アリストテレスは、次のようにことを言つてゐる。つまり、「……最もすぐれた悲劇の物語構成は、『単純』なそれではなく『複合的』でなければならず、それも『恐ろしく』また『いたましい』出来事を描写するものでなければならぬ。また、その人物の設定としては、徳と正義において特別にすぐれているわけでもなく、しかしまた自分の悪徳や邪悪さなどで不幸になるのでもなくして、ある『過ち』のために不幸におちいるような人であり、大いなる名声と幸運のうちにある人物たちのひとりでなければならない。……しかも、むごたらしい出来事が『近親関係』のうちに起ころうのような場合、例えば、兄弟が兄弟を、息子が父親を、母親が息子を、息子が母親を、殺害したり、殺害しようともくろんだり、或いは、他のなにかそのようなことを行なつたりする方が、ふつうの場合よりも効果的であり、また、知らずに行なつて、あとで『近親関係』が知れるというのも、より効果的である」と言つてゐる。これらは、まさに「その通り」であり、実に見事な「考察」になつてゐるかと思う。

ただ、ここでアリストテレスの『詩学』をあれこれ取り上げるつもりはないので、あと

は、各人の読書にまかせたいと思うが、ただ、ここでの「悲劇」の定義としては、基本的には、「……良かれと思つてやつていることになるかと思う。——一方、例えは、悪いことだと知つて向かつてしまふ」ということになるかと思う。——一方、例えは、悪いことだと知つていながら、何か悪いことをして、たとえ不幸になつたとしても、それは、「悲劇」ではなくでしまうのは、むしろ「自業自得」になつてしまふ。また、酔っぱらい運転やスピード違反などで事故を起こした場合も、やはり「自業自得」になつてしまい、いわゆる「悲劇」にはなりにくい。それゆえ、「悲劇」となるためには、基本的には、「……良かれと思つてやつていることが、結果として、悪い方向（例えは不幸）へと向かつてしまふ」ようなものでなければならないのである。

また、「悲劇」と「喜劇」との違いは、一体、何かと問えば、それに対し、アリストテレスは、次のように語つてゐる。——つまり、「……悲劇とは、われわれ自身よりすぐれた人物たちを描写するものであり、一方、喜劇といふのは、比較的劣悪な性格の人物の描写である」と述べている。もちろん、これだけでは、余りにも大ざつぱ過ぎるかと思うが、しかし、その「本質」（的）は、的確に捉えている（つまり「ど真ん中を射抜いて、いる」）のである。——例えは、「喜劇」の場合、その「比較的劣悪な性格」こそは、まさに様々な「出来事」（お笑い）を生み出す、まさに「源泉」そのものであり、しかも「比較的」というのは、観てゐる人たちに「不快感や嫌悪感或いは憎悪感」などを与えない程度の、まさに「にくめないような人物」ということである。——例えは、寅さんシリーズや釣りばかシリーズやばか殿シリーズ、その他などは、みな「同じような性格」であり、それは、決して「すぐれた人物」ではなく、むしろ「欠陥のある人物」であり、その人物の実に様々な「無知や思い違い或いは浅知恵その他」などから、実際に様々な「出来事」（お笑い）が生み出されるとともに、本来ならば、周りの人の中ではかなり変わつた存在でありながら、その「にくめないような人物」設定であるがゆえに、その「言動」も常識はずれなことが多くても悪意がないという、そういう印象を与えることによつて、かえつて、様々な「不快感や嫌悪感或いは憎悪感」などを取り除いているということである。一方、その内容が的を射てゐるような時には、観てゐる人たちの「共感や涙など」を呼び覚ましては、いわゆる「笑わせながら、しかも泣かせる」という、まさに「喜劇」の「神髄」そのものとなり、それは、「悲劇」だけではなく、「喜劇」でも、それが真に優れた「喜劇」であれば、いわゆる「カタルシス」（つまり「心の浄化」）を生じさせることもでき得るという、その代表としては、例えは、チャップリンの一連の「作品」などを挙げてもよいのではないかと思う。

十一、最後のコロス斎唱

さて、ソポクレスの『オイディップス王』からは、話が大きくそれてしまつたが、その『オイディップス王』の最後は、次のような「言葉」（コロス斎唱）で終わつてゐる。つまり、「……おお、祖国テバに住む人々よ、心して見よ、これぞオイディップス、かつては名だかき謎の解き手、権勢ならぶ者もなく、町びとぞりてその幸運を、羨み仰ぎて見しも

のを、ああ、何たる非運の荒浪に 吞まれてほろびたまいしそ。されば死すべき人の身は、
はるかにかの最期の日の見きわめを待て。何らの苦しみにもあわずして この世のきわに
至るまでは、何びとをも幸福とは呼ぶなかれ」と。これは、実に見事な「締め括り」であ
り、例えば、「かつては名だかき謎の解き手」とあるが、それはもちろん、スフィンクス
の解き難き「謎かけ」を解いたことであり、その結果、「……権勢ならぶ者もなく、
町びとこぞりてその幸運を、羨み仰ぎ見るような存在」にもなつたが、しかし、その「名
だかき謎の解き手」であるがゆえに、かえつて、オイディップス王は、自らの努力で自分自
身の「生い立ち」（その「全人生」）の「謎解き」まですべてやり尽くしてしまい、その
結果として、終には自分に背負わされたまさに「運命」（或いは「宿命」）そのものまで
解明尽くし、その余りにも呪われた「運命」（或いは「宿命」）に堪えきれずに、終には
自らの手で両眼を突き刺すという、まさに「悲劇」の主人公そのものになつてしまふ。そ
れが、まさに「……何たる非運の荒浪に 吞まれてほろびたまいしそ」であり、それは、
他人によつて滅ばされたのではなく、むしろ自らの「意志」によつて、まさに「良かれと
思つてやつていたことが、結果として、すべて悪い方向（つまり不幸）へと向かつてしま
つた」ということである。そして、「……されば死すべき人の身は、はるかにかの最期の
日の見きわめを待て」とあるが、それは、「……棺桶に收まるまでは、その人の人生がど
うなるかなどはまったく分からぬ」ということであり、たとえ今は幸せだとしても、そ
れは、明日の幸せを何ら保証してくれるものではなく、また、たとえ今は恵まれていな
くても、その人の努力と幸運次第で、まさに明日という「道」が開けることは、いくらでも
あり得ることである。そして、最後は、「……何らの苦しみにもあわずして、この世のき
わに至るまでは、何びとをも幸福とは呼ぶなかれ」と合唱している。——つまり、人生と
いうのは、まさに最後の最後までどうなるかはまったく分からぬものであり、それゆえ、
人生の「途中」（途上）で、例えば、自分は幸せだと、あるいは自分は不幸だと、ま
た、あの人は幸せだと、あるいは不幸だと、その他、どのようなことであれ、それは、
最期の日になつて、初めて分かるものであり、それまでは、決して「幸せとも不幸とも呼
ぶことなかれ」ということである。

*

*

「
」

「雲」について

例えば、古代ギリシア最大の喜劇作家であったアリストパネスの数多くの「作品」のなかには、有名なソクラテスが登場して来る『雲』という作品もあり、それは、特に作者（あるいは当時の人たち）がソクラテスという人物をどのように見ていたのか、また、当時の古代ギリシア人の「新旧のものの考え方の違い」などを知る上でも、非常に貴重な作品の一つであるとともに、この劇が上演されたのは、ソクラテスが四十六歳の時であった。

そこで、その作品の「内容」（ストーリー）を順を追つて考えてみたいと思うが、まず、「父親」（ストレプシアデス）は、「息子」（ペイディピデス）の「馬狂い」（馬を買うこと）によつて、多額の借金を抱え込んでいるとともに、その支払い期限が迫つていて、夜も眠れないという「心的状態」であり、何か「打開策」はないかとあれこれ思案しているうちに、ふとあることを思いつくことになる。それは、息子を「ソクラテスの学校」（思案所）に入れることを思いつくことになる。それは、息子を「ソクラテスの学校」（思案所）に入れるということであり、その「思案所」（思索所）では、「……正邪にかかわらず、議論に勝てる方法を、金さえ出せば、教えてくれる」という所であつた。ところが、息子（ペイディピデス）は、「……あのほら吹きの、青白い顔をして、履物もはかないでいる連中のことでしょう。悪いダイモンに憑かれているソクラテスだの、カイレポンだのの一味の、そういう人たちの仲間へ入るなんて、そんなことは、とても出来はしません」と断つてしまう。それに対して、「父親」（ストレプシアデス）は、「……あの人たちのところにはなあ、二種類の論があるということだ。内容はともかくとして、強い論と弱い論だ。そしてこの両論のうち、弱い論の法が、不正を主張する立場なのだけれども、議論の上では勝つという話だ。だから、お前がこの不正の論を習つて来てくれれば、今わしがお前のお蔭で背負わされている借金は、返さないでいいことになるだろう。一文も、だれにもだ」と言うと、「息子」（ペイディピデス）は、絶対にいやです、と強く拒否してしまう。

そこで、「父親」（ストレプシアデス）は、「……まあいい、わし自身が思案所へ出掛け行つて、教育を受けるとしよう。そうすると、どうだろうな、のろまのこのおれが、年を取つて、もの忘れもひどいというのに、精密議論の細かい点が覚えられるだろうか。まあ、行つてみるほかはない」ということで、その「思案所」（思索所）の戸を思い切つて叩くことになる。家中から弟子が出てきて、「……本当に無学な奴はこれだから困る。お蔭でせつかく発見した思案を流産させられてしまつたではないか」と言うと、「……これはごめんなさいよ。何しろ遠い田舎から出てきたもんだからね。それはそうと、いまのその流産させられたものを、ひとつ聞かせておくんなさいよ」と言うと、「……同門の弟子以外には話せない」と応え、「父親」（ストレプシアデス）は、「……それなら安心して、わしに聞かせなさい。このわしは、この思案所へ弟子入りにやつて来たのだから」と答える。そこで、弟子は、「……今さつきカイレポンに、ソクラテスが問い合わせを掛けられたのだ。蚤は自分の足の何倍を飛ぶのかということをな。というのも、カイレポンのもじやもじやした眉を噛つた蚤が、ソクラテスのはげ頭に飛び移つたからだ」と言い、「……へえ、それをいつたいどういうふうに計つたのですかい」と訊くと、「……至極巧妙なやり方なのだ。まず臍を溶かす。それから蚤をつかまえて来て、その両足を臍の中へひたすのだ。またそれからこれを冷やすのだ。そうすれば、蚤の足のまわりにペルシア風の靴が発生するという寸法だ。それを脱がせて、所定の距離を計つていたところなのだ」と言う。

また、ある時は、「……カイレポンが、ぶよは、口で鳴くのか、それとも、尻で鳴くのか？」と、ソクラテスに質問したところ、ソクラテスは、「……ぶよの腹の中は狭い。だから、この細いところを通るのに、息は無理押しして、しゃにむに尻へと直行することになる。ところが、この狭い通り路にとりつけられている肛門は、空洞になつてゐるから、その空気の圧力で音響を発することになる」という話やら、また、つい最近では、せつかの一大思想を、青とかげのために、取り逃してしまつたという。それは、「……月の軌道と回転のさまを調べておられたのだ。ところが、上を向いて口を開けておられたので、屋根の上から、夜陰に乘じて、青とかげが小便をかけたという話」などをする。

もちろん、これらは實に馬鹿馬鹿しい話であり、観てゐる観客たちもあきれで大笑いしだろうと思うが、しかし、その「笑い」は、ただ単に「劇上のソクラテス」だけではなく、実際の「ソクラテス」にも向けられていたことにもなるのだろう。というのも、ある有名な人物を主人公にして喜劇を書く時には、できるだけその人物の特徴をとらえて、それをかなり誇張した形で、面白おかしく書き上げるものだが、しかし、それは、まつたくの嘘ではなく、見てゐる観客にも、「そうだ、そうだ、そういうところが確かにあるぞ！」と思わせなければ、喜劇としては成功したことにはならないからである。つまり、ソクラテスという人物は、「……天上地下のことを探究し、弱論を強弁するなど、いらざるふるまいをなし、かつ、この同じことを他人にも教えている」ような人物として、一般に、アテナイの市民たちにもそう思われていたのだろう。そうでなければ、この喜劇が受け入れられるはずもないからである。もちろん、この「喜劇」そのものの面白さも当然あるだろうが……。

一、思案所内部の全景

さて、次は、前景の被いが取り除かれて、思案所内部の全景が示されるが、そこには、例えば、地下のことを探究している人たちや地の底（タルタロス）深く闇の世界を探つている人たち、また、天文学や幾何学（測地学）などを行なつてゐる人たちがいる。そして、最後に、高みに浮かんでゐる（つまり「釣りかご」の中の）ソクラテスが、いよいよ登場することになるが、それに対して、「父親」（ストレプシアデス）が、「……まず第一に、お前さまは何をしてござらつしやるのか、お願ひだわしに教えてください」と訊くと、ソクラテスは、「……これなん、空氣をふみ、思いを太陽のまわりに馳せてゐるところだ」と答える。そして、「……さよう、天空のことというものは、思想を宙に釣るし、思索を思索そのものと同類の、空氣によく混ぜるのでなければ、科学的に正しい仕方で発見することは出来なかろうというわけなのだ」と言う。そして、「……お前がやつて來たのは、何のためだ」と訊くと、「……弁論の仕方を習いたいと思つてですわい。何しろ利払いだの、借金取りだのと、因業に取り立てられ、荒らし廻られていて、家財も差押えを食つてゐる始末だからね。……わしに一つ伝授しておくんなされ。お前さまの持つてござる二つの論のうち、借金をまるまる返さないですむ方の奴をさ。お礼のところは何とでも請求通りに支払いますからね。神様に誓いを立ててもいい」と答える。

それに対して、ソクラテスは、「……神さまに誓うんだって？ どんな神様のことかね。最初断つておくが、われわれのところでは、神さまなんてものは通用しないのだ」「……

へえー？ ジやあ、誓いの時に通用するのは何ですかい」と訊くと、「……お前は確實なところを知りたいと思うかね。神事というものは、科学上正しくは、どういうものであるかということを」「……ぜひとも、なろうことなら」「……そしてわれわれのあがめまる雲ひめさまと、言論の交わりをすることをも」と訊くと、「……はい、はい、どうぞそういうことにお願いします」ということで、ソクラテスは、入門入信の儀式を行なうことになるが、その部分は省略して、ソクラテスは、「……そこな老人よ、しづかに口をつてしまい、わが祈りを心してうけたまわれ」。「……ああ主なる、わが君、大地を宙にささえたもう、無量のアエール（空氣）よ、ひかりかがやくアイテール（上空の澄んだ大氣）よ、稻光と雷鳴をもたらす、おそろしの女神、雲ひめたちよ、いざ立たせたまえ、これなる思索所の空高く、おん姿すがたをあらわしたまえ」と言つて、「雲の精」（コロス）を呼び出し、やがて、「雲の精」（コロス）の声が聞こえてくる。それに対し、「父親」（ストレプシアデス）は、「……ソクラテス、教えてくだされ、これはどなたですかい。このおごそかな声を聞かせたのは、あの世からの精靈ですかい」と訊く。ソクラテスは、「……いや、ちがう。これは天の方から下られた雲の精だ。働かないでぶらぶらしている連中から、大へんな信仰を受けている女神たちだ。気のきいた意見、たくみな討論、知性のひらめき、奇抜な言葉、遠廻しの言い方、たたきつけるような弁舌、要領の良い把握などをさずけて下さるもの」であると答える。

つまり、当時、非常に人気のあつたソフィストたちは、家庭教師のような形で、青年たちに「弁論術」（いわば「巧みな話術」）などを教えていたが、それは、いわば「口先ひとつ」で、生計を立てているような人たちであり、今日で言えば、まともに働かなくとも、例えば、インターネットで「儲けみたいな、そういう人たちの「神」（いわば「信仰の対象」）こそは、まさに「雲」（つまり「雲姫たち」……雲・霧・靄・露など）であり、当時の青年たちは、ソフィストたちのそのような「生活」（生き方）に憧れていたことにもなるのだろう。それでは、なぜ「雲」なのかと言えば、それは、当時の自然哲学者たち、例えば、タレスは、万物の根源は、「水」とし、また、アナクシメネスは、「空氣」だとし、そして、ヘラクレitusは、「火」だとした。また、ピュタゴラスは、「数」だとし、また、エンペドクリスは、「四元素」と「愛と憎しみの二力」とした。そして、デモクリトスは、「原子」アトムだとした。そのように当時の自然哲学者たちは、まさに「無神論的自然観」に立っていた。つまり、「自然」（つまり「四元素」）こそは、まさに「万物の根源」であり、それゆえ、この世を生み出した「神」は、いわゆる「オリンポスの十二神」ではなく、むしろ「自然」（つまり「四元素」）であるという「考え方」に立っているのである。それゆえ、そのような「考え方」（つまり「無神論的自然観」）に立っている人たちの「信仰の対象」は、いわゆる「オリンポスの十二神」ではなく、むしろ「自然」（その中の「雲」という「設定」（つまり作家の「作り話」））になつてゐるのである。

そして、作中のソクラテスの考え方は、「……雲が、多量の水にみたされて、必然に運動するようになると、雨をいっぱいに含んで、垂れ下がることは必然で、それからその重くなつた雲が、相互にぶつかり合つて、破裂し、ひどい音を出す（雷鳴）を出すわけだ」と言う。「……でも、必然にそういう運動を雲にさせるのは、だれなんですかい。やっぱりゼウスじやあないんですかい」と訊く。それに対して、「……とんでもない。それはむしろ青雲（アイテール）のディーノス（渦巻）なのだ」と答える。「……ディーノス？」

それは気がつかなかつた。ゼウスなんてものはいないので、その代わりに今は、ディーノスが支配しているとわね」と感心する。そこで、ソクラテスは、「……それでは、もうわれわれの認めるもの以外は、いかなる神も認めることはないだらうな。われわれの認めるのは、かの『混沌』と、この『雲』と、それから『弁舌』の、この三体なのだ」と言う。「父親」（ストレプシアデス）は、「……それ以外のものは、たとえ面と行き会うことがあつても、言葉を交えることさえ絶対にしはしませんや」と答える。そうすると、コロスの「長」（雲の精）は、「……さあ、それなら、私たちに何をしてもらいたいのか、言ってごらん。遠慮はいらない。私たちを尊び、敬つて、わたしたちの意にかなう人間になろうと努めている限り、お前の望みはかなえられるだらうからね」と言う。そこで、「父親」（ストレプシアデス）は、「……自分の望みはわずかなもので、一級の弁論家になつて、自分の借金を踏み倒したいだけなのだ」と言う。それに対して、コロスの「長」（雲の精）は、「……それなら、そのお前の希^{ねが}うものを取らせよう。大した望みではないのだから、いずれにしても、わたしたちに仕えるこれらの者に、思い切つて身をまかせることだ」ということで、いわゆる「ソクラテスの学校」（思案所）に入つて勉強することになるというものが、いわば「前半部分」になるということである。

二、中段（中休み）

さて、ここで「中断」（中休み）が入り、そして、作者自身の「考え」、つまり、なぜ、このような「喜劇」（つまり『雲』）を書いたのか？ その作者自身の「思いや考え」などを素直に語るという場面になる。それを要約すると、それは、次のような内容である。つまり、「……さてご見物のみなさま、あなた方には、ざつくばらん本当のことを、これなる育ての親ディオニユソスさまに誓つて、すっかり打ち明けて申し上げましよう。わたくしは賞が得たいのでござります。優秀な作家だと認められたいのでござります。それはあなた方こそ理想の見物客、この作こそわたしの喜劇作品中の傑作と考えたからで、まず誰よりも先にあなた方に、わたしのこの一大苦心の作を味わつていただきたいと思つた次第でござります。（中略）、また生れつき行儀のよいところは、とくとごらんいただきたい。この作はまず第一に、皮でつくつた妙なものを縫^ぬい付けて、ぶら下げるようなことはいたしておりません。例の真赤な^{ふともの}太物で、子供衆を笑わせようなどとはいつておりません。また^{はげ}禿頭^{はげ}をからかつたり、主役の老人に杖でその場に居合わせ^{だれかれ}誰彼^{だれかれ}をなぐらせて、へたな洒落^{しゃれ}をごまかしたりするようなこともいたしません。頼むところは作品そのもの、詩歌の力だけで、ここへ出て参りました。そして、同じものの焼き直しを二度も三度も持ち出して、あなた方をあざむく算段もいたしません。いつも新しい様式を入れるのに知恵をしぶり、どれも似たものばかりというようなことがなく、みんなそれぞれに面白いものばかりでござります」と、いわば自分の「喜劇作家」としての「信念」を語つてゐる。

三、正論と邪論

さて、「話」（ストーリー）は、「ここ」から「後半部分」に入つて行くことになるが、それは、次のような内容からである。まず、ソクラテスが思案所から出でてきて、「……」ん

な男つて、一人も見たことない。粗野で、ゆうずうがきかず、ぶきつちよで、忘れっぽいときていい。幼稚園程度のことを覚えるのにも、覚えるより先に忘れてしまう男なんて。しかしまあ仕方がない」ということで、「父親」（ストレプシアデス）を外に呼び出すことにする。そして、再び、二人のとんちんかんな「問答」が展開（何度も繰り返される）ことになるが、例えば、「にわとり」のオスとメスとをどう呼ぶかという「問答」では、オスは、にわすどり、メスは、にわめすどりと呼ぶとか、また、訴訟を消してしまう方法としては、水晶玉を（虫メガネのように）使つて、わしの訴訟ごとが記されているところを、溶かして（焼いて）消してしまうとか、また、訴訟をはぐらす方法としては、まだ先番の訴訟事件が行なわれていて、わしの番の呼び出しが来ないうちに、走つてつて、首をくくるのは、どうですかい。だつて、わしが死んでしまつたら、誰も訴えようがあるまいとか、それに対して、ソクラテスもあきれてしまい、「……愚劣だ、もうお前には教えてやらん、とつとと出てうせろ」と言うと、「……そりやあまたなぜですかい、どうしてですかい」と訊くので、「……お前は何を教えてもらつても、すぐ忘れてしまうのだ。うそだと思うなら、いま最初に何を教わつたのか、言つてみろ」と言われて、「……ええと、はてな、最初は、と、何だつけ、出てこない……」ということで、お前ではだめだから、息子を嫌でもなんでも連れてこいという展開になつていくのである。

そこで、「父親」（ストレプシアデス）は、「息子」（ペイデイピデス）を何とか説得をして連れて来ては、ソクラテスを呼び出し、そして、この子は、もともとは利口な子で、二つの「論」を教えてやつておくんなさいと心からお願ひをする。そして、この場面で、あまりにも有名な『正論と邪論』との両者の「議論」が展開（繰り広げられる）ことになるが、その内容の「要約」は、次のようなものである。

まず、最初のうちは、『正論と邪論』とがお互に相手の悪口を言い合うばかりで、それでは埒があかないということで、コロスの長は、「……これ、腕力沙汰はやめにしなさい。悪口を言うだけでは仕方がない。それより、お前さん（正論）は、昔の人の教育がどんなものだつたかという、その模範を見せるがよい。——一方、お前さん（邪論）は、新教育の模範を見せるんだね。そうすれば、この男（息子）もお前さん方の反対弁論を聞いた上で、自分で判断して、どつちを勉強するかが決められるというもののさ」ということになり、そこで、まず、『正論』の方から「話」を始める事になるわけである。

四、正論（強い論）

さて、その『正論』の内容であるが、それは、「……しかば、いにしえの駆けのほどが、いかなるものであつたか、お話し申そう。それはこのわしが、正論をはいて、いや栄えに榮え、節度というものが重んじられた頃のことだ。まず第一に、子供は口の中でもぐもぐ言うような話し方を、人前ですることは決して許されなかつたのだ。また次には、音楽を習いに行くのに、同地区の者は集団で、雪が粉のように降つて来た時でも、外套は着ないで、秩序正しく往来を歩いて行かなければならなかつた。それからまた、両膝をくつつけて、前をかくすようなことはしないで、堂々と「雄たけび遠くひびき」とかいう歌を、父祖の代から伝えられた音律に合わせて歌うことを、早くから覚えるように仕込まれたのだ。そしてかれらの誰かが、ふざけた真似をしたり、あるいは昨今の新しがり屋の音楽家

がやつて いるよう な、と ても 满足 に 曲げ るこ との 出来 ない、妙な 曲げ 方を しりす れば、歌神を 無に する 者だ と い う ので、散々に 打 擲ちとうちく、折 檻せつかん さ れた もの だ。また、体 育の 先生の と こ ろへ 行つて 座つて いる 時には、子供は 膝ひざを ち ゃんと 前へ 出して、外 部の 人 に 不 作法の と こ ろを 見 られ ない よう に し、また、逆に 立ち 上がる 時は、砂を な らして 自分たちの 若さの 跡形あとかたを、好 色の 連中 の 眼に さ らさ ない よう に 気を つけ な けれ ば なら なかつた。そ し て 当 時は、誰も 子供は 脣そそきから し た には 油を ぬ らなかつた ので、かく しど こ ろには 露と 薄毛が、まるで 花梨かりんを 見る よう に、花咲いて いた のだ。また 声を やわらか にくねらせ、眼に ものを 言 わせ て、われから 色好みの 連中 に 近づく ような こ もも しな かつた。また 食卓では、二十日 大根の 根の と こ ろは、子供が 取つて は いけ ない ものと され、また 甘い ものばかり 取つて 食べたり、くすくす 笑いを し たり、足を 組んで いたり す る こ もも、許されなかつたのだ。これが、かの マラトンの 勇士を やしな つた、わしの 教育の よりど こ ろ で ある」と 言う。

また、「……この わしを 選ぶ よう に し な けれ ば なら ん のだ。わし が 強い 方の 論だ。そ う す べ ば、盛場アゴラを き らい、温浴おんよくを 避け、恥を 恥と し、誰かお前を 嘲あざける 者 が あ れば、憤慨す る と い う こ とを 解 す る よう に な る から だ。また 年長者 が 近づいて 来た 時には、座席から 起立を し、両親に 対して は 無礼の ふるまいを す る こ もも、ほかに 何 ひとつ 恥ずべき こ とを 行な わ な い よう に な る だ ろう。つまり 慎みと い う ものの 理想像を、お前 が あらためて 建立 し よう と し て いる こ と に な る から だ。また 踊り子の 家へ 急ぎ 足で 出 か け て 行つて、見 る ものに う つ つを ぬ か し、売女ばいたに 林檎りんごを 投げ て もら つて、あたら名を 傷つけ られる ような こ もも ない だ ろう。また 父親に 口 答えを す る ような こ もも 決して ない し、また、(両親を) 廃人アイベントス 呼ば わりして、自分 が 大切に 育て られ て、そこから 巢立 ち し た 年月を、かえつて 逆さかう らみ す る ような こ もも ない だ ろう」と 力説を す る こ と に な る。

それ に 加え て、「……花やぐ 每日を 体 育場で、元気な顔を し て 過ごす こ と に な る だ ろう。そ う す べ ば、お前 の 胸は、いつ も 元気い つぱい、色つやは 輝く ばかり、肩幅も ひろく、舌 短く て、尻は 大きい。——一方、今 時の やり方を 習い と する な らば、まず 第一に、お前 の 顔色は、蒼白あおじろなり、肩幅は 狹くせま、胸は 薄い。舌ばかり 長く て、尻は 軽い。また、醜い こ とを、すべて 美しい と 思い、美を かえつて 醜と す る よう に 仕込ま れ、尻癖しりぐせの わるい 真似まねいを す る よう に なる だ ろう。そして、盛場アゴラを うろつ いて、ひと 泣かせ の 途方も ない こ とを、口に まかせ て しやべりまく り、また、つまらない 事件に 引きこま れて、しつつ こ い 反対弁論の やりとり に、心身を 擦りつぶす ような こ と に な る の で ある」と 語る。

五、邪論（弱い論）

一方、『邪論』の 内容として は、「……ま ズ、何よりも 弱い 立場の 議論を 取りながら、それで い て 勝つ と い う、こ の こ と こ そ 一 万 の 金貨 よりも 値打ち が ある と い う もの だ。また、温浴を 先 ず 第一 に 許さ ない だ ろう と 言つて いる。それは、男を 懦弱だじやく に す る、大へん 悪い もの だ と 言う が、しかし、ヘラクレスに ゆかり の 温泉 と い う もの は あ れ けれども、いつ たい ど こ に ヘラクレス ゆかり の 冷泉 なん て もの が あ る の か」と 反論する。それ に 対して、「正論」は、「……ああ、これ だ。これ が あ れ な の だ。若い もの に 一 日 中 い つ も おしやべりば かり さ せ て、風呂場を 满員 に し、角力場を 空 に す る もの な の だ」。「……それ からまた、盛場アゴラで 暮らす の を、お 前 は 悪く 言つて いる が、おれ は い い こ と だ と 言い たい し、また、若い 者

が弁舌^{べんぜつ}を練るのは、よくないとぬかしくさつているが、わしは大いに練るべきという論だ。

またさらに、慎みを忘れるなど説いているが、慎みを忘れないなんてことのうちに、何があるのか、すつかり見てみたまえ。どれだけたくさん人の楽しみを取り上げられようとしているのか、わかるだろう。稚兒^{わらわ}さんも女も、乱痴氣さわぎも、うまい食べ物も飲み物も、また高笑いすることも、いけないことになるのだ。しかしこれらのものを取り上げられてしまつたら、生きていることが君に、何の値打ちがあることになるだろう」と反論する。

さらに、最後は「色好み」の問題になるが、例えば、「……いま君が過ちを犯すとするね。恋をして、ひとの女を取つたりするわけだ。そうすれば、次はつかまつて、身を滅ぼすことになる。申し開きができないからね。ところが、このおれについていれば、自然のままに振る舞つて、はねるも笑うも勝手次第、どんなことでも恥ずかしいなどと思うことはないのだ。間男でつかまるようなことがあつても、相手にこう言つて反論するだろう。何も悪いことをしたのではないと言つてね。そして、それからゼウスを引き合いに出すのさ。あんな神さまさえ、恋と女には弱いのだ。それを君は、死すべき人間の身で、どうして神さまにも出来なかつたようなことを、することが出来るだらうか」と。また、公職弁護人になつてゐる連中は、どういう人間だね。みんなおかま好きだらう。それは、悲劇の作家も、大衆の指導者も、また、ここにいる見物客だつて、おかま好きの方が多いだろう。「……すると、お前の言い分は、いつたい何だね」と反論されることによつて、「正論」は、「……もう負けた。多数決だから」ということで、いわゆる「正論」と「邪論」との議論は、ここで終りを告げることになるのである。

*

さて、今までの話を聞いていた父親と息子に対して、ソクラテスは、「……さあ、いつたいどうするんだね。ここにいる息子を、つれて帰る方を希望かね。それとも、わしに弁論の教育をしてくれというのかね」という言葉に対して、「……教えてやつておくんなさい。びしひとやつておくんなさい。そしてどうか忘れずに、これを上手に鍛えて、一方ではこまごました事件にも合うようにしておいて、もう一方の顎^あは、もつと重大な事件に向くように鍛えておくんなさい」ということで、いわゆる「思案所」（思索所）へとソクラテスは息子を連れていく。一方、父親は、自分の家へと帰る。——さて、その「思案所」（思索所）で訓練を受けた「息子」（ペイディピデス）は、借金の取り立てにやつてきた人たちを、身に付けた達者な「弁論術」で相手を言い負かして、いわゆる「借金取り」を追い払うことには成功するが、しかし、一方、「父親を殴る」ようになつてしまふ。その理由としては、例えは、子供が悪いことをすれば、「……親は、子供のためにと思つて叱^{しか}つたり、また、殴つたりするもの」であるが、それと全く「同じ論理」によつて、「……子供は、父親のためにと思つて叱^{しか}つたり、また、殴つたりすることは、正当な行為であり、それゆえ、悪いことではない」と主張する。しかも、母親を殴ることも、同じ理由で正当なことだと主張する。それに対して、「父親」（ストレプシアデス）は、こんなことを教えた「思案所」（思索所）は絶対に許せないということから、その「思案所」（思索所）に火を付けて、燃やしてしまふというところで、「話」（ストーリー）は、終わることになるのである。

さて、「作者」（アリスト・パネス）は、なぜ、このような『雲』という作品を書こうとしたのか？ それは、かつては「繁栄と榮華」を極めていたアテナイが、どうして今のよう「腐敗・墮落」してしまったのか？ 特に「若者」（青年たち）の「心」を「腐敗・墮落」させたものは、一体、何かと問うた時に、それは、まさに「新教育」のせいであり、その中心にあつたものが、まさに「ソフィスト」たちであり、その「ソフィスト」たちが家庭教師として当時の「若者たち」（青年たち）に、いわゆる「弁論術」（いわば「巧みな話術」）などを教えていたために、それを身につけた「若者たち」（青年たち）は、その「弁論術」（いわば「口先一つの理窟」）を巧みに捏ねて（つまり「悪用」）して、今まで「正義」（正しいこと）とされてきた「正論」さえも、ことごとく「愚論」にしてしまうという風潮とともに、もう一つは、特に「無神論的自然観」によって、いわゆる「神の存在」が否定され、まさに「何も恐れるものがなくなってしまった」（つまり「畏敬の念」）を喪失してしまったことこそは、当時の「若者たち」（青年たち）の「心」を「腐敗・墮落」させている、まさに「最大の要因」であると考えていたということである。もちろん、世に「ソフィスト」たちと呼ばれる人たちは、数多くいただろうが、その中でも、当時、すでに有名だったソクラテスこそは、（もちろん、実際は「ソフィスト」ではなかつたが）、まさに「喜劇の主人公」（つまり「ソフィストの代表」）として最もふさわしいキャラクターを兼ね備えていたということである。そのために、ソクラテスがその「主人公」（つまり「登場人物」）になってしまったということである。

もちろん、当時の古代ギリシアのアテナイでは、いわゆる「直接民主政治」が行なわれていた「都市国家」であつたが、その「都市国家」においては、何よりも「自由と平等」とが尊重されている社会であり、それゆえ、この「民主制」というのは、それが健全に機能している間は、むしろ「好ましい社会」と言えるものだが、しかし、この「民主制」というものは、遅かれ早かれ、必ず、「腐敗・墮落」して、いわゆる「衆愚政治」（或いは「衆愚社会」）に深く陥り、実に多種多様な「社会病理」に深く悩まされることになる。なぜなら、まさに「自由」（つまり「何をやっても個人の自由」）という美名のもとに、法に触れなければ、或いは、人に見つかなければ、何をやっても構わないという、そういう、もうありとあらゆるうそやでたらめまた不正や悪徳などが堂々とまかり通り、そして、正しくまじめに生きる人間などは、「大ばか者」となり、他人よりも少しでも多くの欲望を貪欲にむさぼることが、最も「幸せなこと」として、他人に見つかなければ、どういう不正を働いても構わないという破廉恥、不道徳、放縱、無責任さが、あたり前のようになってしまう。それだけありとあらゆる不正や揉め事や犯罪などが、毎日のように生じてくるような、そういう全く手がつけられない社会の混乱と腐敗と墮落とを招き、その国家のまさに「混乱と腐敗と墮落ぶり」は、もう目を覆うばかりになってしまいます。

そして、そのような「民主主義」の最大の欠陥を、ソクラテスやプラトンなどは、はつきりと見抜いていた。——すなわち、この「民主主義」というものは、われわれ人間の「内面」を骨の随まで腐らせるとともに、われわれ人間の「精神的自立」（或いは「道徳的自立」）をどこまでも妨げるものであると。

*

*

雲
崇
樂
心
魂
根
崇
樂
心
魂
根
か
あ
が
ら
こ
う
か
か
あ
が
ら
こ
う
か
か

「参考文献」

- ※底本「オイディップス王」ソポクレス・藤沢令夫訳（「岩波文庫」）
- ※底本「ギリシア喜劇 I アリストパネス（上）雲」（「筑摩書房」）
- ※底本「世界の名著アリストテレス」（中央公論社）